

連載

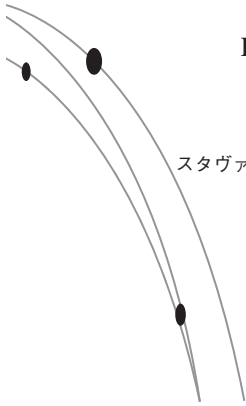
フィールド・アイ

Field Eye

ノルウェーから——①

スタヴァンゲル大学 小野坂 優子

Yuko Onozaka



平等主義社会に暮らす

私がノルウェー人の夫とともにアメリカの大学から夫の実家近くのノルウェーの大学に移ってからもう10年になります。大学からアメリカに移り住み、そのまま10年以上住んだ後だったので、「西洋文化圏内の移動だからそんなに大変ではないだろう」と高を括っていたのですが、行って見て、アメリカとヨーロッパは全然違う、と遅まきながら実感した次第です。北欧の片隅にある人口500万人の小国ノルウェーは、あまり日本人に馴染みのある国ではありませんが、おそらく高福祉、男女平等などで知られているかもしれません。そんなノルウェーについて、住んでいる者の視点からお伝えしたいと思います。

さて、皆さんはヤンテの掟というのをご存知でしょうか。デンマーク人の作家サンデモーセのフィクションの村での掟なのですが、ノルウェーだけでなく、スカンジナビア諸国全体の社会規範として、スカンジナビア人の心に焼き付けられていると言われています。内容はというと、「自分を特別だなどと思てはいけない」「自分を私たちより優れているなどと思てはいけない」「自分を私たちより頭がいいなどと思てはいけない」「自分を私たちより優れているなどと自分にいきかせてはいけない」「自分は私たちよりも多くを知っているなどと考てはいけない」……といったものが10カ条。ここで言う「私たち」とは、自分以外の人、ひいては社会全体のことを指します。進歩的なスカンジナビア人が本当にこのような規範を信じているのか、と不思議に思われるかもしれません。もちろん、スカンジナビア人がこの掟を100%

信じて実行しているわけではありません。ただ、人々はこの掟のエッセンスを今も保有しており、その考え方が北欧の平等主義と高福祉高負担社会を可能にしていると思われます。

例えば、ノルウェーの社会構造はとてつもなくフラットで、日本ほど上下関係を気にしません。大学でも、学生は教員を最初から下の名前で呼び捨て。私たちも、上司にあたる学部長は呼び捨て。学部の教授会ではPhDの学生も参加し、バンバン発言します。ノルウェーでは、職場でランチをみんなで一緒に食べる習慣がありますが、私の学部でも、教員もPhDの学生も事務の人たちも一緒にテーブルを囲んでランチを食べます。あまり社会的地位が高いから偉い、という考え方をしませんし、そのように振る舞うとみんなに嫌がられます。また、ノルウェーのほぼ全ての子供たちは公立の学校に通っています。ノルウェーの親たちは、子供を私立の学校に通わせて将来的に有利な立場に立たせたい、というような気持が希薄なばかりか、公立の学校に通わせてノルウェー的価値観を得ることが大切であると考えているようです。医療サービスも、公共のものを使う人がほとんどです。公共の医療サービスでは、(特に専門的な)治療を受けるのは待ち時間がかかりますが、待ち時間は基本的に平等です。公共サービスを使う以上、みな平等で、お金持ちはよい学校に行ける、医者に早く診てもらえる、というものではありません。どちらの場合にもプライベートのオプションも存在しますが(私立の学校やクリニック)、あくまでも少数派なのです。つまり、前述のヤンテの掟は「あなたは私より偉くないし、特別扱いされるべき存在でもない」という平等主義(または希薄な特権意識)や、皆が同じような生活を送る社会民主主義のシステムにつながっているように思います。

とはいえ、もちろんノルウェーにも、日本やアメリカより程度は低いとはいえ、経済格差は存在します。しかし、社会的弱者や低所得者を支えるのは当然、というコンセンサスが確立されています。例えば、友人たちと子供の放課後のクラブ活動の話をしていたときのこと。そういった活動は学校ではなく、地域コミュニティが提供しているケースが多く、その場合、親たちがコーチをしたり、試合や遠征に付き添ったり、はてはボランティア活動でクラブ活動費を捻出したりします。そのため、それらのクラブ活動の参加費は安く抑えられていますが、親の時間的な負担はかなり大

きくなります。参加費をもっと高くして親の負担を減らすべきだという夫（ノルウェー人だけどアメリカで教育を受けた経済学者）に対し、友人たちは「それでは、そういった活動で一番恩恵を受けるであろう貧しい家の子供たちが参加できないからだめ」と反対姿勢です。普通の人からこの発想がでてくるのがノルウェーらしいな、と私は思うのです。貧しい家庭が困るから、という態度がすでに上から目線ともとれますが、少なくとも社会階層固定化はよくない、という気持ちが見て取れる発言です。また、私の同僚はとある地方自治体から巨額の研究資金を得て大規模な教育の実証実験をしています。自治体が水力発電から得た莫大な収入をどのようにコミュニティー全体に役に立つ用途に使えるか、というところから始まり、コミュニティー内の社会経済的格差を教育を通して是正したい、というのが自治体のひとつの狙いであったそうです。日本で、例えば原発で稼いだお金を子供の教育格差是正の実証実験に使うような自治体があったいくつあることでしょうか。

ノルウェーはもとからして、物事の分布の幅が狭い、というのも一つの要因でしょう。人口も少ないですし、また、歴史的に見ても、あまりリソースにも恵まれず、みんなが平等に貧乏だった国です。その後石油の発見で格段に豊かになりましたが、石油からの恩恵もノルウェー政府年金基金グローバルによって、利潤の一部は現在と将来の国民のために積み立てられています（その額およそ110兆円）。税制も平等主義政策のため、税後の個人の収入の分布の幅は狭く、ジニ係数もOECD諸国でトップレベルの低さです。公立の学校間の学力の差もそれほど大幅に開いていません。住環境に関しても、アメリカのようなゲッターは存在せず（一部移民が多い地区はあるようですが）、普通でも日本よりは格段に良い住環境で生活できます。スーパーマーケットの品揃えの少なさには最初びっくりしましたが、ものすごい高級品も並んでいない代わりに、どれを選んでもそれなりに高品質です。確かに物価は高いですが、高福祉とあいまって、普通に働けば普通に生活でき、そんな普通の生活をしている人が沢山いるのがノルウェーです。逆に言えば、隣

人との差があまり開いていない分、格差や平等に敏感なのかもしれません。アメリカのように、あまりにも貧富の差が開きすぎていると、比べる気すら起こらないかもしれません。

物事の「幅」をバリエーションと思えば、それはまた同時にリスクの高低を表します。ノルウェーは公共政策や市民の平等嗜好により、かなりリスクをそぎ落とした社会であると思います。大成功して大金持ちになる可能性はノルウェーでは少ないですが、そのかわり大失敗して路頭に迷う可能性も低いのです。そして、例えばリソースフルな両親のもとに生まれるとか、マシムラテストに合格するような性格であるなど、偶然による人生の当たりハズレが良くも悪くも影響しにくい社会です。これは、アメリカで経済学を勉強した身としては、はじめは少々抵抗がありました。なぜなら、これでは競争による切磋琢磨や、成功へのインセンティブに欠けます。どんなに頑張ってもそれに見合うペイオフが期待できないからです。そのため、実際、ノルウェーでもそんな可能性に賭けたいタイプの人アメリカなどに移住していると思います。しかしまた、競争社会で、みんなが常に他人より抜き出たい、というギラギラした社会は、刺激的ですが疲れてしまいます。そういう意味で、ノルウェーはかなり気が休まる社会です。アメリカでは、「誘拐されたら大変！」と、子供から常に目が離せなかった私も、ノルウェーでは子供たちだけで学校に歩いて通わせています。駐車した車の座席にハンドバッグや財布を置いておいても気になりませんし、カフェでラップトップを置いたままトイレに行くのも平気です。基本的に他人は信用できる、という漠然とした信頼感は、やはり平等感や皆がそれなりの生活を送っているというゆとり感と無関係ではないでしょうし、それが暮らしやすさや国際的にも最高レベルの幸福感とつながっていると思われ

おのざか・ゆうこ スタヴァンゲル大学ビジネススクール教授。最近の著作に“Household Production in an Egalitarian Society,” *Social Forces*, forthcoming. 環境経済学、応用計量経済学専攻。